フィノ
April / 2017
4
VOL. 11

Fino

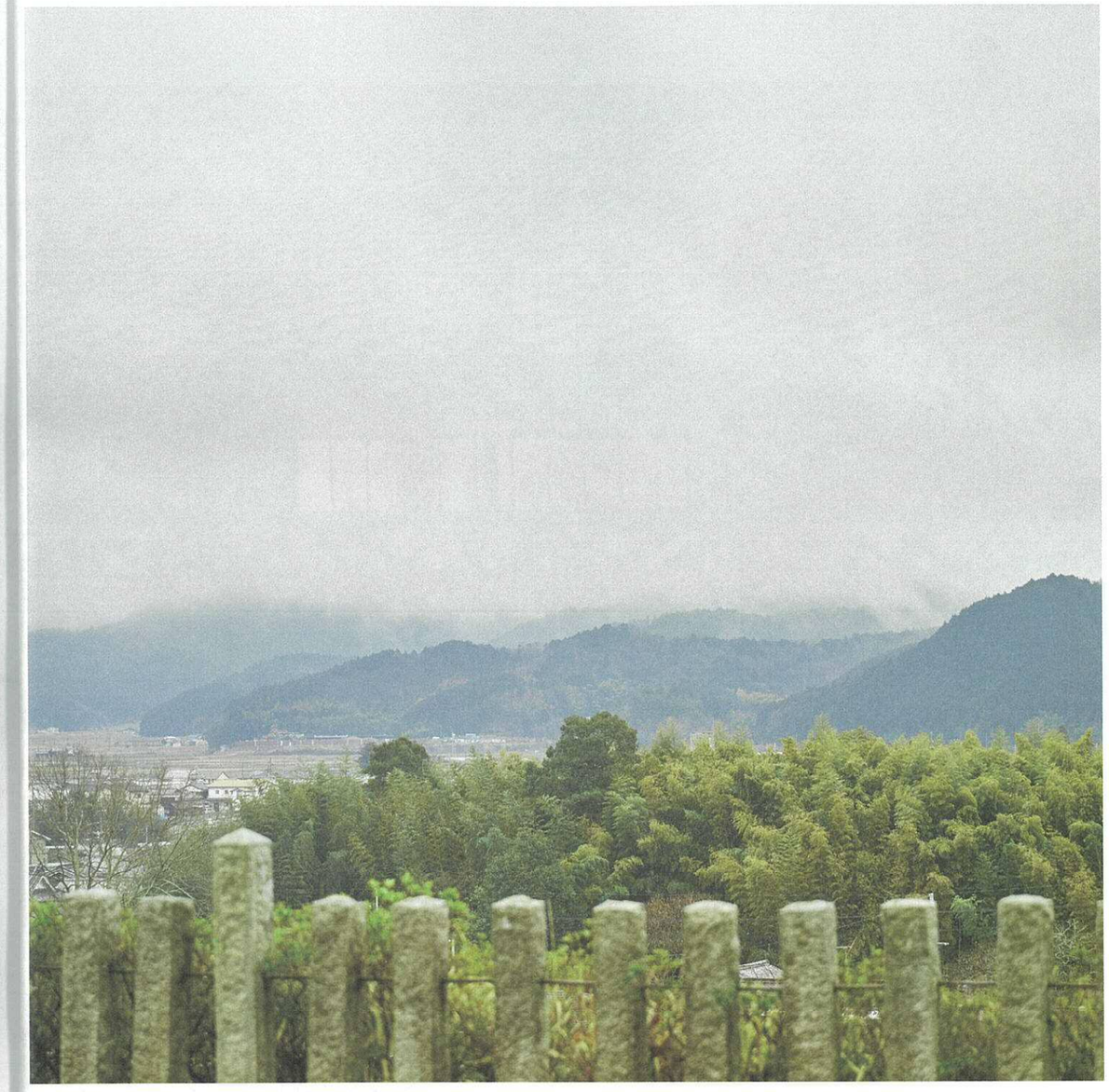
TOKYU ROYAL CLUB MEMBERS' MAGAZINE

人と歴史を繋ぐ町
丹波篠山（たんばささやま）

四方を山に囲まれた兵庫県の静かな城下町、丹波篠山。
そこに残る古民家に新たな命を吹き込んだことで、町が活気づいている。
そんな話を聞き、400年の歴史をもつ場所へと向かった。

文／平林朋子　撮影／宮濱祐美子

西町に静かに佇む『篠山城下町ホテルNIPPONIA』。薄暮のなか、訪う人を柔らかな光が誘い温かく迎え入れる。



高台にある篠山城跡からは、町とそれを取り囲む山々が一望できる。この場所からの景色を愛する住民も多い。

さまざまな文化を取り入れ発展してきた城下町

家路を辿る人々が行き交う夕暮れ時。その背景には薄暮のなか佇む古民家が連なる……。そんな風景を写し取った写真を見て以来、気になっていた丹波篠山を訪れることにした。

篠山は、古くから京都と山陰、山陽を結ぶ交通の要衝の地だった。1609（慶長14）年に徳川家康の命によりわずか9カ月ほどで築城された篠山城を中心に発展し、丹波国篠山藩六万石の中心地として栄えた。この城跡と周辺に残る城下町の一部は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

「篠山城は京都の二条城と構造が似ているといわれています。野面積みの石垣やお堀などは築城当時のままなんですよ」と教えてくれたのは、NPO法人『町なみ屋なみ研究所』の理事を務める今村俊明さん。篠山で生まれ育ち、仕事で他府県に長く住んだ後、2000年に帰郷した。

「譜代大名としてこの城に住んだ松平家と青山家は、教育や文化の普及に努めました。京や江戸の文化を積極的に取り入れ、町家の造りも京風の平入と江戸風の妻入建築が混在しています。他所の文化を柔軟に受け

河原町妻入商家群と呼ばれる地域を歩くと、妻入（左）と平入（右）建築で建てられた古民家を見ることができる。

入れる気風の表れだと思います」

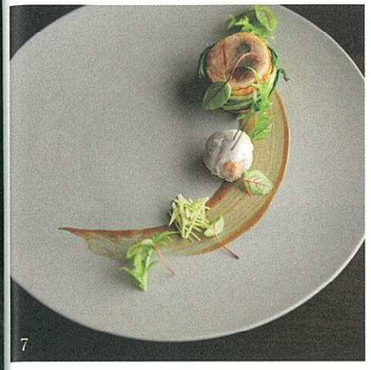
この町を歩いて興味深く感じるのは、いわゆる〝観光地〟ではないということだ。まずここに住む人々の暮らしがあり、そのなかに溶け込むように古民家を用いたカフェやショップなどが点在している。

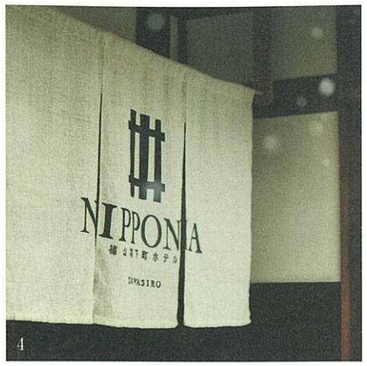
「少子高齢化や高額な改築費用などのため、放置や解体される古民家も少なくありません。そこでボランティアの募集と工事参加によって工費負担を低減する仕組みを作り、再生と活用のお手伝いをするNPO法人を2010年に立ち上げました」と今村さんは語る。今では関西圏だけでなく全国から人々が集まり、専門家の指導のもと整備を進めている。

「建物も生きて呼吸しているので、人が住んで風を通したり暖めたりすることで息を吹き返すんです。朽ちかけていた建物が修復されて灯りが点り、人の息遣いが感じられるようになると、町も元気になりますね」

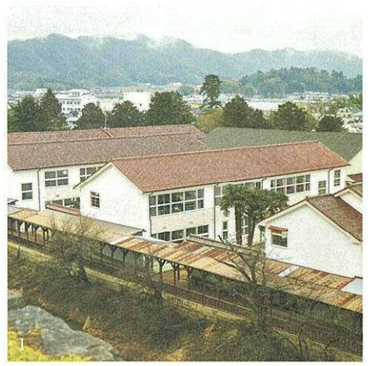
再生した古民家が多く残る西町の自治会長である熊谷満さんは言う。

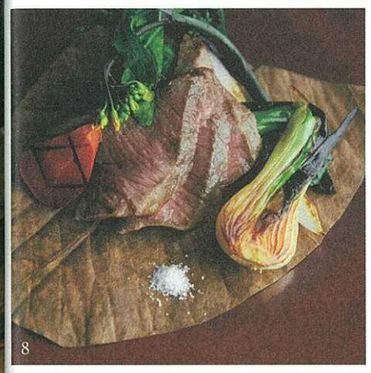
「古民家を時代に合わせて活用し、空き家と利用したい人をマッチングして新たな用途を作る。そうして外部の人の力も借りながら、ここにある伝統や文化を形にして、次の世代に繋げたいと思っています」

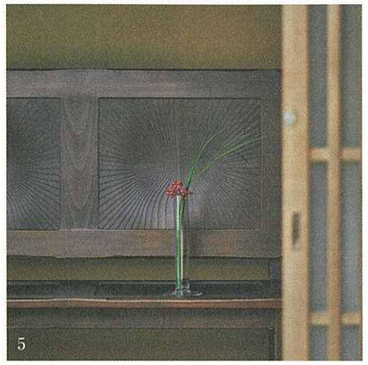

7



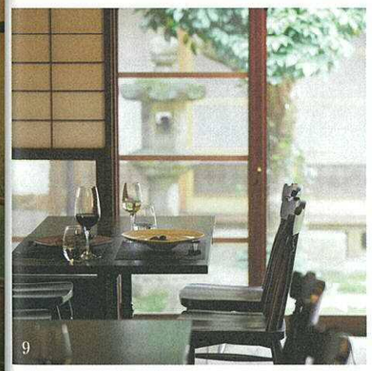
4

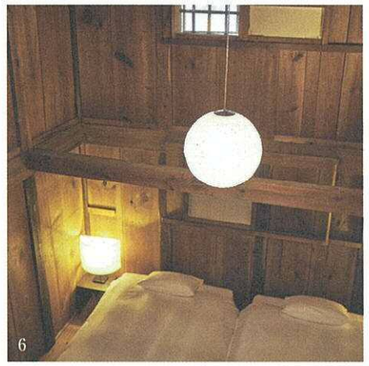

1

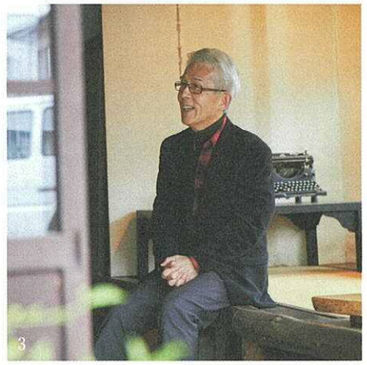

8


5

2


9


6


3

1.篠山城跡の側に建つ小学校。2.御徒士町武家屋敷群。3.『町なみ屋なみ研究所』の今村俊明さん。4.5.6.建物の持ち味を活かして再生した『篠山城下町ホテルNIPPONIA』。7.8.9.ホテル内レストランでは大西健シェフが腕をふるうフレンチを味わえる。地元産素材を多用したシンプルで力強い味わいが印象的。焼き加減が絶妙な但馬牛のステーキは赤ワインと黒豆味噌のソースとともに。1、2月の8,000円（税サ別）コースの一例。

古民家を再生することが新たな町の魅力に繋がる

この地域で古民家再生が盛んなのには理由がある。中心となって推進しているのが、土地の文化や歴史を継承していくためにさまざまなプロジェクトを手掛ける『一般社団法人ノオト』の理事・藤原岳史さんだ。

発端となったのは、篠山市郊外にある『集落丸山』。ここは限界集落で、築150年ほどの古民家が住む人もなくそのままになっていた。藤原さんたちはリノベーションを施し宿泊施設として再生させ、成功を収めた。この経験を活かし、市の中心部で〝負の遺産〟となっている空き家の活用を考えていた町の人たちとともに、再生事業に携わるようになったのだそうだ。

「空き家はあちこちに点在しているため、再開発する際にカフェ、レストラン、ホテルなど、地図を俯瞰して見ながらバランスよく役割分担ができるようにと配置を考えました」

そうして2015年に生まれたのが『篠山城下町ホテルNIPPONIA』だ。レセプション機能を有するメインの『ONAE棟』以外の棟は、町なかに散らばるように置かれている。

「通常ならひとつのホテルにある機

選ばれた客人のみが入ることを許されたとされる“通り土間”。左手前には竈が残り、当時の暮らしが感じられる。